



家族の多様性とセックス・ジェンダー・セクシュアリティ(第3回講演,家族・身体・セクシュアリティ)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原, ひろ子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/10004

第3回講演

家族の多様性と セックス・ジェンダー・セクシュアリティ

原 ひろ子

1 はじめに

みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきましたように、「家族の多様性とセックス・ジェンダー・セクシュアリティ」という題でお話をさせていただきます。

私が家族を考えるときの基本的な前提は、生物としての「ヒト」と文化を持って生きている「人間」という、2つの軸が交錯する場として家族を見るということです。家族のことを考えるときには、社会的な現象としてだけではなくて、生物としてのヒトということがそこに必ず入ってくるという立場で考えてまいりました。

家族を研究する際には、homo sapiensという哺乳類の1つとしてのヒトのありようを一応棚上げして、社会的な存在としての人間に関して分析するというのも、非常に大事なことではあります。ところで、私はもともと文化人類学を専攻しております。その文化人類学者のなかにもいろいろなアプローチをとる人がありますが、私の場合は、生物としての「ヒト」と文化を持つ「人間」が世界のいろいろな場所で、しかも人類の長い歴史のなかで、ときにはチンパンジーやゴリラやオランウータンといったような哺乳類、霊長類のほかの種との比較において、一体どういう特徴があるのかといったことを考えてきているわけです。そこで、まず文化人類学の

世界で家族についてどういうことが言われてきたかについて考えてみることにします。

ジョージ・ピーター・マードックという文化人類学者が第2次世界大戦の直後あたりから世界規模の比較作業を始めました。文化人類学者は19世紀の後半より北アメリカでの調査を開始し、19世紀末から20世紀前半にかけてアフリカ、南アフリカ、ヨーロッパ、アジア諸国などに出かけ、そのフィールドワークの記録を蓄積していました。そのたくさんの記録のなかから記録として質的によいと、マードックおよびそのチームが判断した社会に関する一定水準の記録を、コーディングしたのです。そして、1949年に“Social Structure”という本を出版しました¹⁾。

その結論は、人類の社会には家族が普遍的に存在しており、しかも核家族（1人の男の人と1人の女の人と、そのあいだに生まれる子ども（たち）で構成される）はどの社会にも普遍的に存在するということでした。核家族はもともと“nuclear family”と表記されました。そしてマードックは家族を「集団」として捉えていたのです。集団というのは特定のメンバーによって構成され、メンバーと、メンバーでない人との間の区別がされているということを前提にしたのです。そこにはどういう問題があるのかについて、今日はなるべくわかりやすくお話しできればと思っております。

日本で生活している場合には、この前提でよいのではと思われる方が多いようですが、世界中の人類の社会を細かく見ていくと、必ずしもあてはまらないことが分かってきました。文化人類学者がこういった学説のようなものを1つ出しますと、それに対して、世界中の文化人類学者が、自分の調査している社会をさらに細かく調べて、「いや、こんな単純なことにはならない」と言って議論しあうということになります。

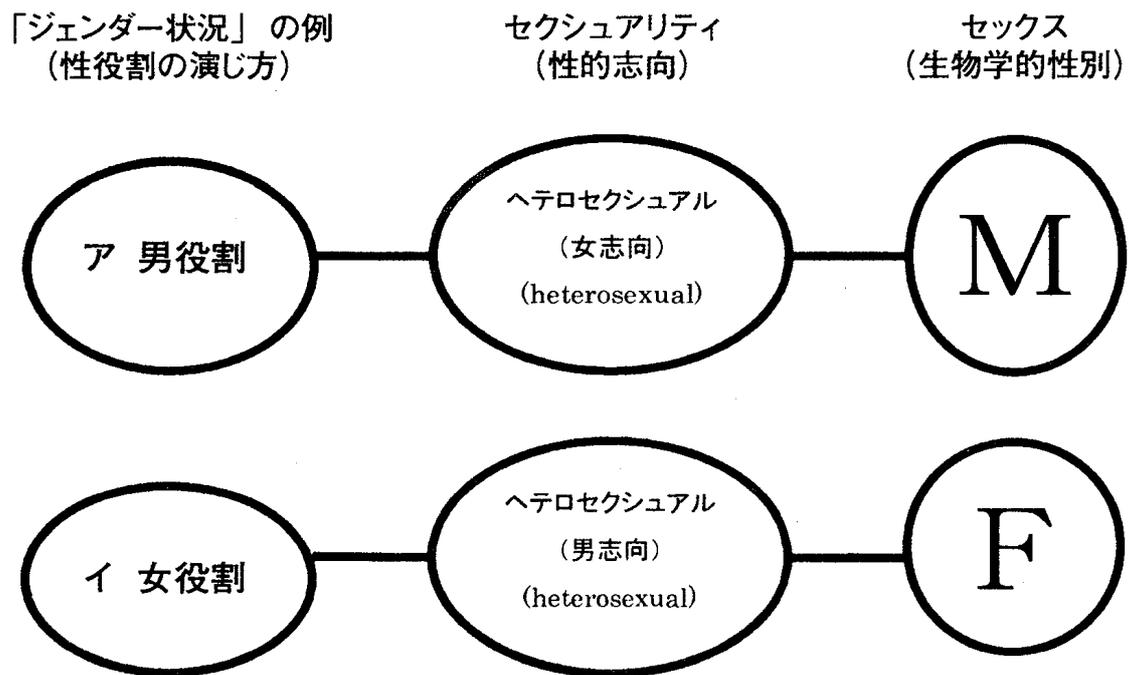
先ほどご紹介いただきましたように、私は1961年から63年にかけてカナダの北西部で暮らしている狩猟採集民の社会で調査をしましたが、そこではマードックの前提は通用しないのです。だから私は、マードック批判をする側に立つということになった次第です。

2 セックス・ジェンダー・セクシュアリティ

ところで、今回の連続講座のテーマは「家族・身体・セクシュアリティ」ということなので、「セックス」、「ジェンダー」、「セクシュアリティ」という言葉の説明をさせていただいて、そのうえで本論に入っていきたいと思います。

まず図1をご覧ください。「M」はMaleで、これが生物としての男、雄です。それから「F」はFemaleで、生物としての女、雌ですね。いかにして生物としての身体ができあがっているかによって、この2つに分かれると、近・現代社会のほとんどの人が考えてきました。

図1 多くの人による「思い込み」(原 2001a: 16頁)



その場合に男の人、雄として生きている人間は、おのずとヘテロセクシュアル (heterosexual)、つまり、女性に愛情を感じ、性的な魅力を感じるといふものだということが前提になって、社会の現象や個人の行動などが進められている。それに対し、雌として生きているhomo sapiensの場合は、ヘテロセクシュアルで、男の人に魅力を感じたり、愛情を感じたりするのが当然だというふうに使われている。それぞれ当該社会において、い

いわゆる男役割とされること、ないしはいわゆる女役割とされることを演ずると申しましょうか、そういうかたちでの行動を取っていくのだとされている。これが図1に示す多くの人による「思い込み」なのです。

近代国家が形成されるのにあたり、多くの国で上記の現象が当然だとされてきました。国によって近代国家になる時期は異なりますが、「憲法」ができ、国会・行政・司法という三権分立が成立し、憲法の下に民法や刑事法など、いろいろな法律が成立していった時期です。ほとんどの近代国家の諸制度は、国民が男と女によって構成されていることを前提としてつくられてきています。だから日本の明治憲法とか、第2次世界大戦後に改正された現行憲法（私が中学のころいわゆる「新憲法」と言っていたものですが）なども人間が男と女で構成されていることを前提としていますから、家族のあり方を規定している民法も同様のことを前提にしているのです。

しかし、近代国家の成立以降も、またそれ以前にも、もちろん今日でも、こういう思い込みで世の中が成立しているために、たいへん苦しんでいる個人も数少なからずいることを忘れてはならないと思います。

しかし、その人たちは、自分がこういうふうに苦しんでいるのだということ自分の親にも言えない。もし親に言ってしまうと、親を困惑させ、ときに怒らせてしまう。職場でもそういうことは表に出しにくいといったケースがあります。しかも、いわゆる国勢調査などの人口統計でも、具体的に数値化されていません。したがって、その数については推測するより他はありません。推計として約5パーセントではないかと言われていています。つまり、100万人の都市であれば、5万人の人がこの図1の図式には当てはまらない。しかし、この状況はDNAのレベルによってのみ決定されるわけではありません。人の成長の過程にも影響される場合があります。このことは後でまたご説明します。

そういう多様な状況があるということで、近年になりまして、オランダやスカンジナビアの国々では、図2（p.59）に示すような多様な個人のあり方が存在する状況を前提にして、法律のつくり方とか、さまざまな社会政策を考え直そうという動きがありました。

しかし日本では、そのような動きは非常に弱いものです。やっと平成15年（2003年）に「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」が成立、公布され、平成16年（2004年）7月16日に施行されました。それにより、性転換手術を受けた人が、戸籍での改性を経て婚姻届を出せるようになりました。これは非常に大きな変化なのです。しかし、いろいろな意味での不便、不自由な生活に直面していらっしゃる現実があります。

このような現実を含めて、「セックス・ジェンダー・セクシュアリティ」について、まずご説明しておいて、そのうえで最後にヘヤー・インディア（カショーゴティネ²¹）の話をしたしたいと思います。

まずは、生物としてのhomo sapiensが、受精卵となる時点から、発生のプロセスを経て、胎児のかたちがだんだん整って、分娩、ないしは出生によって、1人の子どもという個体として世の中に生まれる。そのほとんどの段階で雌になる方向で発生のプロセスが進んだ場合ほとんどの個体は、「F」になります。雄になる方向で発生のプロセスが進むと、ほとんどの個体は「M」になるのです。発生の段階でいろいろなことが起こり、形態的にも身体の生理的機能の上でも、多様な個体が出生しうるのです。

多くの近代社会では、赤ちゃんが生まれると医師が「このお子さんは男の子です」「女の子です」というふうに2つに分けて報告します。しかもそれは外性器の形状によって分類されているわけです。

ところで、外性器の形状がはっきりとしない、この子は男の子か女の子かわかりにくいときもある。それは、発生のプロセスでいろいろなことが起こるからです。その場合には、おちんちんがいわゆる通常の赤ちゃんのような形状に発達しないまま生まれてきたお子さんのおちんちんを普通の形にするという手術は簡単ではないとのこと。最近外見を整える手術は技術的に可能になってきているみたいですが、機能は「M」とならない場合もあるわけです。

多くの場合には、おちんちんになりそうだった部位を切り取って、女の子の生殖器に見えるように形成手術をするほうが技術的に楽だそうです。そこで例は少ないけれども、近代社会でそういう形成をする技術があるところでは、手術をして、言うなれば男の子かあるいは女の子かに外見上の

形を整えるということが行われてきています。時には、生まれてきた赤ちゃんの両親にも知らせないまま、そのような手術が医学の権威において行われてきたこともありました。なかには医師が、「実はかくかくしかじかなので、どうしましょうか」と親御さんに相談して、親御さんが「では、お願いします」ということになったという場合もあり、この図2の中でもケースバイケースで異なるということなのですが。

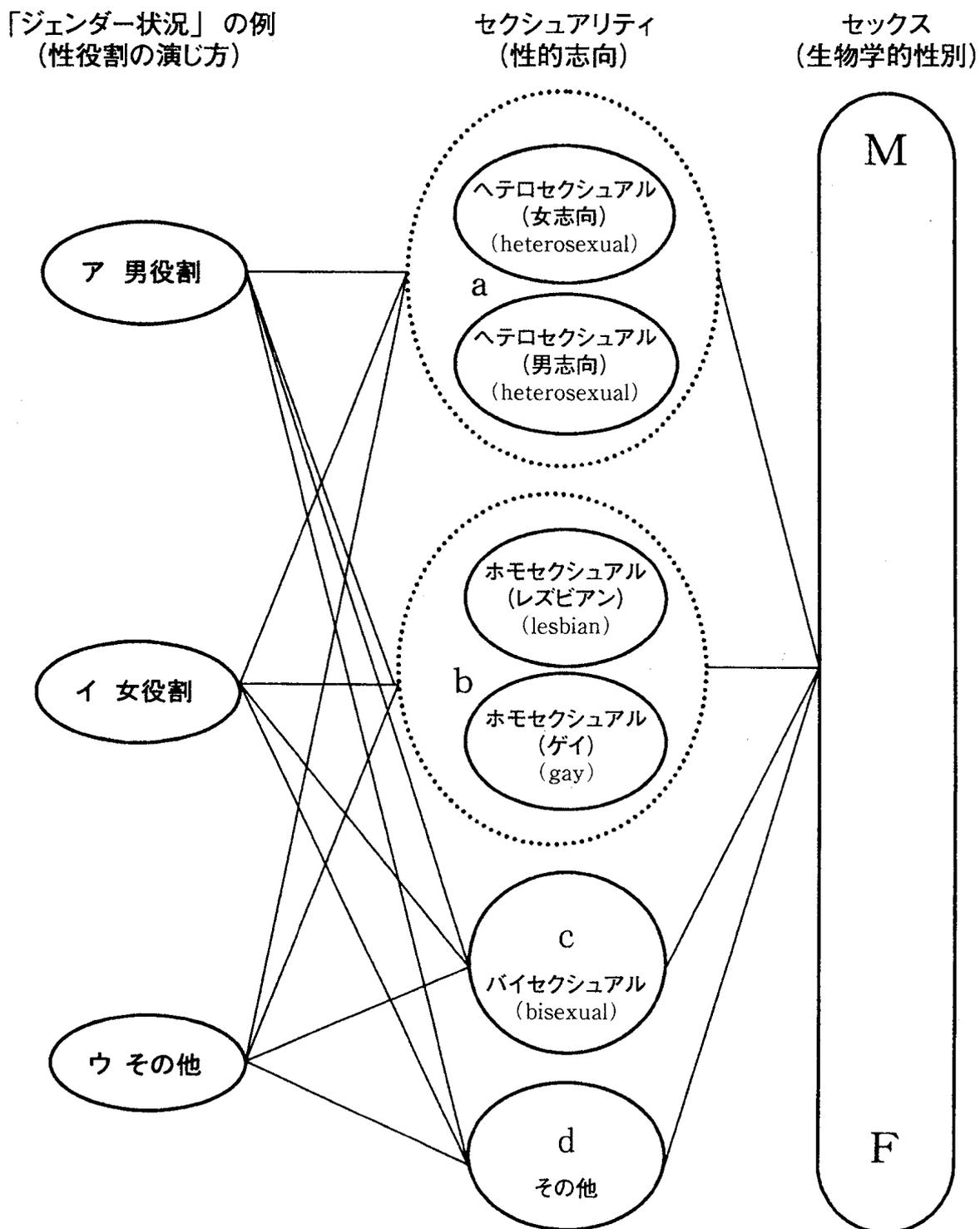
近代国家で、国勢調査を実施するのは統治のうえで大事なことです。自分たちの国に何人いるのか、特に戦争になった時に、軍隊に徴用できる人たちはどのぐらいいるかを知ることも重要でしたので、人口統計を取るといのは非常に大事なこととされました。また、食糧生産と食糧消費とのバランスを考える、社会が新しい産業構造に入る時期に労働力人口の見通しをつける、といったことが近代国家の統治において非常に大事な情報なので、国勢調査が5年に1回、あるいは10年に1回、行われることになるわけです。その他の国家統計も重要となっています。

今日、いろいろな事象に関して用いられる国連統計も、そういう国家統計を基礎にしています。そこで、男の人がどのぐらい、女の人がどのぐらいいるのかとか、男の人の就学率はどのぐらいで、女の人の就学率はどのぐらいかというふうに、二分法での分類が行われております。

しかし、外性器の形状以外に、身体の中の見えないところのいろいろな部位の形状のバリエーションがあるわけです。これはちょっと考えると当然のことですよね。鼻の形とか、耳の形とかは、みんな千差万別です。同じように、身体の中の内臓の形状などにも、いろいろなバリエーションがあるわけです。それと同時に、ホルモンの機能のしかたにもバリエーションがあります。

医学の研究なども、95パーセントの人のことを考えると、男と女という2つの分類で進んできているのですが、そうでない例えば約5パーセントと推計される人のことは無視していい数なのかどうかという点が、非常に大きな問題になるところだと思います。

図2 ジェンダー・セクシュアリティ・セックスの相互関連 (原 2001a : 19頁)



いろいろ中間のかたちで生活する人がいるという現実を、図2のようなかたちで私は図解しています。図1のように2つに分かれるのではなく、実際には、かなり連続しているということを示しています。

図2の真ん中のセクシュアリティ（性的志向）の部分ですけれど、いわゆる男、つまり「M」として生物学的に存在している人も、セクシュアリティに関していえば多様でありうるのです。この場合、なぜホモセクシュアルということがありうるかということ、「自分の身体は男だが、私は女として自認し、女の人に魅力を感じる」という場合に、外から見ると男の人が女の人を愛しているように見えるかもしれないけれど、ご本人が、性自認としては、「私は女として生きたいと思っている」といったような場合もありうるからです。

次に、バイセクシュアルの人は、ヘテロセクシュアルな性愛も経験するけれども、ホモセクシュアルな性愛も経験するタイプの人です。同じ瞬間に両方はできないけれども、時間帯を変えて体験し、そういうことで自分の人生は充実するのだと考えて生活している人もいます。

もうひとつ、図2の「d」というのは、人間を性愛の対象にするのではなくて、例えば動物とか、ときには石ころとか、いろいろなものを性愛の対象とする場合です。

さらに左の性役割という部分では、ごくおおざっぱに見ると、男役割、女役割、その他いろいろあるとして、人々には、どういう組み合わせも成り立ちうるということを示しています。「こんなに多様だったら頭がくらくらしてしまう」と思うのか、「いろいろあって面白い」と思うのか、それはそれぞれの方々のものの感じ方、考え方によります。

ものごとを2つに分けて考える二分法のほうがすっきりしていると思う方もいらっしゃるかもしれませんが、このようにものごとを二分することによって、苦しんでいる人たちがこの社会のなかにいらっしゃるということを念頭においておく必要があると思います。

このように、人間のありようの多様性をふまえ、家族について考えてみるとどうなるでしょうか。このことについてのお話は切りがないですが、今日は時間が限られておりますので、ここはこの程度にとどめておきます。

次に、「セックス・ジェンダー・セクシュアリティ」のところの、その多様な在りようと、文化・社会的規範、それからその他の規制の多様性と変動ということについて考えていきたいと思います。

近代国家になる以前の社会のなかでも、このように二分法で考えていた社会もたくさんありますが、北米のアメリカ先住民のなかには、多様な状況が人間として当たり前であるということを前提にして文化が成立していたケースもあります。北米大陸の先住民の文化は非常に多様で、言語にもいろいろな語族（アルゴンキン語族、アサバスカン語族、その他多数³¹）がありますし、生態系の異なるところで生活しているという意味でも生活が多様なのです。例えば大平原で暮らしていて、弓矢でバッファローなどを射ったり、まわりの部族と戦争したりしていた人たちのなかには、他の部族との戦争に出かける男たちに祝福を与えるのは女の宗教的リーダーであったりしていました。政治そのものも、内政を司るのが女であったり男であったりと、これにも多様なバリエーションがあります。

そういう人々のなかには、図2に示すような多様な状況が人間として当たり前だと思って文化をつくった人たちがいます。その人たちにとっては、ひとりひとりがその人らしい人生を生きることを当然としています。例えば戦争に行くことが男としての役割とされている場合、身体の形状が男でも女役割を取っている人がいたら、その人には戦争に行きなさいとは言わない。また彼らの性生活そのものが、それぞれに多様であったのです。

しかし、アメリカ合衆国とかカナダという国が近代国家として統治を始めて、先住民を統治下におくようになります。それらの国の「憲法」、ないしは、各州の「州法」に従って、先住民が住民登録や人口調査にも応じるようになりますと、結局、さきに述べた幅広い人間の多様性は無視されて、男女いずれかの性に二分されざるをえないことになり、その二分法に準ずる1人の市民としての位置づけが行われるようになっていったという経緯があったのです。

日本でも江戸時代には、北米大陸の状況ほど多様ではないですが、二分的な性別のみではなくて、地域社会や職業集団のなかで、個人の志向性や嗜好が無視されることなく、生活のあり方の多様性がかなり認められてい

たようです。近代的な法制度を伴う法治国家として統一に向かうにつれて、男女の性別の二分法に準ずる法律がつくられていったといえましょう。

ヨーロッパの諸国でもそういうプロセスを経て近代国家の整備が行われていったようですけども、さきほど触れましたように、近年、オランダやスカンジナビアなどの国々では、こういう性別の単純な二分法を修正する方向で、さまざまな法律の改正が行われ、言うなればひとりひとりの人間の、生きていくうえでの生きやすさというのを大事にしようという精神に基づく法律がつくられるようになってきています。

そうすると、「家族とは何か」という事を考える際に、国の政策のなかでの家族の位置づけも変化していくという現象が見られるのです。つまり、「婚姻は男女の間にのみ成立する」とするか否かなどを含めて、法の規定が変化することが理論的にはありうるわけです。

3 人類的規模での家族の多様性と、特定時点の特定社会における家族の多様性

さて、3番目の、「人類的規模での家族の多様性と、特定時点の特定社会における家族の多様性」ということを考えてみましょうという部分に、既に半分以上踏み込んでいるのですが、そこに進んでいきたいと思えます。

マードックが言った、家族の4つの基本的機能とは、「①性」、「②生殖」、さらに「③経済（生産と消費）」、「④教育（子どものしつけなど）」です。

マードック（1949）によると、「時代が移るにつれて生産の場としての家族の機能が次第に弱くなって、ほとんどサラリーマンになっていく。第一次産業も大規模化して、事業としての農業ということになると、農業の事業主のもとで働く労働者としての農民も出現してくるといったようなことで、家族が生産の場になるという度合いが、近代化が進むにつれて減るが、消費の場としての家族は、依然として持続していく」と言いました。

さらにマードック（1949）は、先ほど述べましたように、「核家族という集団は人類社会に普遍に見られる現象である」と言ったのでした。そして「インドのナヤール族は、母系制の大家族制による生活を営んでいるが、

細かく見ていくと、その大家族のなかで、核家族の単位は1つの単位として認められている」と、主張したわけです。

1949年にマードックの著書“Social Structure”が刊行された直後に他の人類学者たちから、例えばイスラエルのキブツの社会はこうであったとか、自分が調査したケースはこうであったという実例を挙げ、そんなに単純に人類社会に見られる「核家族の普遍性」として片付けられないぞと次々と主張されるようになりました。

マードックに対する批判の中で、1つ出てきたのは、「家族集団」に加えて「家族圏」という考え方が成り立つという点でした。「家族圏」というのは、「集団」のようにメンバーがはっきり確定されるのではなく、ひとりひとりの個人が誰を自分の家族と思うかによって、その「家族圏」が特定されるという考え方なのです。

ゆえに、生物学的な現象としては、必ず1人の「M」と1人の「F」のhomo sapiensのあいだで子どもが生まれる。そして子どもAの側から見れば、父や母のキョウダイであるオジ、オバの中にもAとの相性の良い悪いがあるわけです。オジ、オバに子どもがいれば、それらの人はイトコたちです。イトコたちの中でAが特定のイトコに親しみを感じていると、その子どもたちを、自分の子どもと同じぐらいかわいいと思うこともあります。今日の日本では私たちの日常生活にもいろいろあるわけですね。イトコが6人いたら、そのなかのすべての人と同じように付き合っていることは稀で、親しいイトコと、そうでないイトコがあるということですね。

京都大学東南アジア研究センターの前田成文さんが1971年から72年にかけて調査なさったマレー半島のマレー人の社会（前田 1986）とか、私が1961年から63年に調査をしましたヘヤー・インディアン（カショーゴティネ）（原 1986a；1989）という人たちの世界では、ひとりひとりの個人が家族圏の中心にいて、「私」が誰とウマが合うか、「私」が誰と一緒に仕事をすると、気持ちよくことが運ぶかという判断を、小さいときからいろいろ経験していて、「私」にとっての親しい人々のカテゴリーが形成されていくのです。

これを、なぜ「圏」と呼ぶかという、個人単位で、ひとりひとりの個

人を中心にして人間の絆の濃淡の範囲が描かれるからです。これは集団としての決まりを持っていない人々のカテゴリーです。こういう「家族圏」の存在が重要な社会も、人類社会のなかにはあるのです。しかも、「集団」としての家族がはっきりと存在する社会においても、個人単位に見ると「家族圏」も重要である社会があり得ます。

ちょうど私がカナダでフィールドワークを行ったのが1961年から1963年までであったので、私もマードックを批判する側に立って、いろいろ論文を書いたということになるわけです。

要するに、私は核家族の存在を否定しているのではありません。否定するのではないけれど、それが「普遍」だと言い切ってしまうまいと批判しているのです。「人類社会の柔軟な多様性を認めながら人類学の研究を進めていきましょう。人間全体について考えていきましょう」と主張するということなのです。

繰り返しになりますが、前田先生たちが、しっかりしたフィールドワークをなさって、「家族圏」という概念を出されたことは非常に大事なことです。

さらに前述のように、「核家族」がその社会で基本的な集団として、そこに存在するような場合においても、社会の成員としてひとりひとりの個人の一生を見ていくと、それぞれの人が、ある意味で独自の「家族圏」のなかでの生活を営みながら暮らしている場合が多いといえるでしょう。日本社会や米国中流白人社会などもそうだと思います。皆さま、ご自分のまわりのことをお考えください。自分や家族の結婚式があるとして、親類縁者のなかで招待する人进行を考えると、イトコを全員平等に招待する場合は少ないのではないのでしょうか。それからお葬式の時でも、いろいろな事情があるにしても、駆けつけてくださるイトコと、そうでないイトコとがあるのではないのでしょうか。

今日の日本では、シンセキ付き合いといっても、特にイトコ、ハトコになってくると、その濃淡の付き方は、親の世代がどんな付き合い方をしていたかの影響もかなり大きいようですが、さらにイトコ本人同士の気持ちや波長が合うかどうかということも関係します。イトコたちの関係は、そ

ういう波長が合う人との付き合いは遠くに住んでいても続くけど、いくら近くにいても、あまり波長の合わないイトコとは、なるべく付き合わないようにするとか、といったことがあります。

そういう付き合いの濃淡があるのが自然だといえるでしょう。しかし、明治時代などの日本の一部の人々の間に見られたように、たとえば本家であれば、家制度が確立しており、本家の長男たるもの、本家の嫁たるもの、かく振る舞うべしという規範が強いと、個人的な感情を押さえつけてでも、その役割行動をしっかりとらないといけないという状況がありました。そういうかたちでの家族のあり方、親族のあり方を義務づける時代の文化もありうるし、地域の文化もありうるし、都市部・郡部にかかわりなく、家の文化というのが強くある場合には、そういうかたちでの役割行動が期待されて、その期待に沿いながら生きていく個人が存在するわけです。

そういう役割行動が、規範として非常に厳しい場合には、各個人を中心とした人間の絆の範囲という「圏」を自由に活性化させることが難しい場合もあります。同じ時代の同じ社会のなかに、役割行動を非常に強く期待されるタイプの生活の場にいる人と、個人の個性を十分に発揮できるタイプの生活の場にいる人というのが、いかなる社会にも必ず存在していると私には思われます。

それと同時に、いくら役割行動をしっかりと期待されている個人でも、それよりも自分の個人の個性を発揮しようとする人が、いかなる時代にもいかなる社会にも必ずいます。例えば、エドワード8世（1894-1972）というイギリスの国王が、ウォリス・シンプソンさん（1896-1986）というアメリカ人の人妻と恋愛して、結局、イギリスの王位を投げ捨ててシンプソン夫人と結婚しました。これは大きな話題になり、エドワード8世は退位しましたが、イギリスの王室そのものは存続したわけです。だから、システムとしての王室は存続する一方で、非常に個性的な行動を取る個人はそのシステムから外れるけれど、個人としての生は別のかたちで全うできる場合もあります。しかし、当事者が死を覚悟して規範から外れるという自己表現をするしかない場合もあります。

これもやはり時代によって、社会によって多様なわけです。そういう多

様な状況のなかで、家族というものを考えてみてください。

次に、多様性のなかでの1つの例として考えたいのが、私がカナダの北方の狩猟採集民カショーゴティネの方たちと暮らしてわかったことです。

私が調査をしたのは1961年から1963年の時点で、もう40年以上前のことです。そのころ人口350人くらいで、1つの言語を用い、1つの共同体を構成していたのです。そして自らのアイデンティティーを持って、隣に住んでいる別の共同体の人たちと自分たちはちょっと違うという具合に考えていたのです。

彼らは、日本の本州の5分の3ぐらいの面積の地域で狩猟・採集の生活をしていました。

彼らが生活していたのはロッキー山脈の東側の北極圏線(北緯66度30分)の近くです。そこで、350人がまとまって移動するわけではないのです。獲物を追いかけて分散して暮らしていました。外から見るとひとりひとりが自分勝手に動いているように感じるかもしれません。しかし結果としてバランスが取れるようになっているのです。誰も他人に命令しません。この人たちは、人に命令することは人間としてあるまじきことで、「人の心を盗むようなことだ」と考えています。

日本の社会では、私たちは物を盗んではいけないと言われますが、人の心を盗むことについては処罰がありません。むしろ、いかにして人の心を盗むかということ、みんないろいろ考えるくらいさえあります。しかし、この人たちにとっては人の心を盗むことこそよくないことなのです。

例えば、私がここにブルーのマーカを2つ置いたまま、どこかに行くとします。そうすると「ひろ子はこれを2つも持っている。じゃあこの1つは俺が持っていてもいいや」と思うのです。「俺のものは俺のもの、人のものは人のもの、だから俺が2つ持っているものを誰かが持っていても、それはかまわない。ときには俺しか持っていないものでも、必要があってその人が持っていったとしたら、それでいいじゃないか」と。

私はテントを移動しながらカショーゴティネの母娘と一緒に暮らしたときも、本当に大事なものは絶対にテントのなかには置かないようにしていました。私のものでも、テントで見えるところに置いておくと、人は気軽

に持ち出し許可なく次々とまた貸しするのです。「どこに行ったのかな」と思っていると、350人が、ばらばらにキャンプ移動しているのですが、ある時、訪れたキャンプで、「ええっ、これ私のものじゃないの」という事があるのです。しかし、そこで「これは私のものじゃないですか。どこから持ってきたの？」と言ってはいけないのです。非常に相手に失礼にあたります。「いま、私、これ使いたいんだけど」と言えば、「ああそうなの、きみが使いたいなら使ってよ」と言われ、やっとその品物が私のところに戻るのです。ちょっとものがなくなっても大騒ぎは禁物です。ものは人びとの間を循環していますから、2週間か3週間すると見つかるのです。

カショーゴティネの家族のことを、残りの時間でお話いたします。

さて1859年にカトリック教会が入ってきました。19世紀に、北米、特にカナダの北方で、アングリカン教会とカトリック教会の間で熾烈な信者獲得競争が展開されます。その際、殺人事件が起こったりしたため、19世紀の中頃、アングリカンの教会とローマ法王庁の間で協定が結ばれ、地図に線を引いて、ここはアングリカン教会が布教する、ここはカトリック教会が布教するというふうに決めました。

たまたま私が調査に行っていた、フォート・グッド・ホープを中心とするカショーゴティネの狩猟域は、カトリック教会の布教先と指定されていました。カトリックの教会が建てられた1859年の時期には、カショーゴティネは遠くアラスカの方まで狩猟採集に出掛け、ときには15年ぐらい戻ってこない人もいました。いずれ戻ってくるとわかっている人たちだったので、数年ぶりに戻ってくるたびに、神父が懸命に布教してカトリック信者にしていったわけです。それで、1930年頃には、ほとんどのカショーゴティネがカトリック教徒になりました。生まれた子どもも洗礼を受けています。そのように、形式的には全員カトリック信者になっていきました。

しかし、この人たちの性生活は教義の通りではありません。人によっては、1人の女の人が1人の男の人と1つのペアとして一生を過ごすという、まれな例もあります。しかし多くの場合、人はときには3人、ときには6人、ときには2人の異性との性生活を営みます。人のライフ・ヒストリーを聞くと、いろいろな相手があります。彼らによれば、1人の異性とだけ

とか、多くの異性と交わるという人が立派だということではないのです。この人たちは、社会のなかで、複数の相手がある人がふしだらだとは誰も思わない。ちょうど、今日の日本で「私は毎日、昼食に素うどんを食べます」というのと、「今日はどうどん、明日はギョーザ、明後日はそば」というふうに、1週間のうちにいろいろ食べるとか、それから「ときにはスパゲティとか、サンドイッチにする」というようなことなのです。誰も、それに関して倫理的な判断は下さない。このようにカシヨーゴティネの性生活には多様なタイプがあると認識されているのです。

カトリック教会の教義では、死別の場合を除いては再婚できず、一夫一婦であるべきとされていますから、結婚するに際しては、2人で神父のところに行って、結婚式に先立っていろいろな教えを受け、教会で神の前に結婚の誓いをします。他の人もお祝いに集まり、そこでダンスやいろいろなことをして楽しく過ごします。そして、教会では2人の結婚をローマ法王庁に届けます。しかし現実にはいろいろな形態の生活があるのですね。

さて、カシヨーゴティネたちは、頻繁にテントを移動します。その理由は、キャンプ地に食べ物や薪などがなくなるといった理由もありますが、人間関係のあり方が多くをしめています。

彼らは、人に「嫌です」とか、「あんた、たばこの吸ったあとの吸い殻を、こういうふうにしてテントのここになすり付けるのをやめてよ」などと言えません。人に命令するのは、人の心を盗むことです。しかし、しばらく相手と暮らしていると、ちょっと気になることが必ず出てくるわけです。日本人の私たちの生活には、嫌だと思って、「やめてよ」と言うか言わないか迷ったり、やめるように言っても相手は馬耳東風で聞き流したり、長年同じことを言っても、ちっとも相手は変わらないということもありますね。彼らは相手にそういうことを言うことができないのです。

そこで、どうしても耐えられなくなったら、もはやひとつ屋根に暮らせないと、一方が出て行くのです。そうすると、どこかにまたすてきな人がいる。その人はついさっきまで別の相手と暮らしていたかもしれないが、そちらもまた嫌になっている可能性があります。そうであればちょうど相手がいるわけです。そこで今度はその人と1つのテントで暮らすことになります。

ところで、テントの持ち主は男性であれ女性であれはっきりとしています。いま自分のテントでこの人と暮らしているけど、テントに執着するよりは、この人のたばこの吸い方のほうが嫌だから、テントを置いて出て行くわけです。それでも彼女のテントは、いずれまた彼女のところに戻ってくるのですから。

つぎに、私が死ぬとします。そうすると、私のテントには私の霊が宿っていると信じているので、私が死んだというニュースが伝わると、他の人が使用していても、私のテントは直ちにその場で焼かれます。私の死霊が怖いからです。物質が巡環するとともに人の心も巡環するのです。そこでこのような行動になるのでしょう。

日本では離婚が成立したあと、女性は6ヶ月間結婚できないが、男性はすぐ再婚できますね。その理由は、前の夫とのあいだに子どもができていた場合、赤ちゃんの親権の問題がからむためと言われていますが、カシヨーゴティネの社会では、そんなことを言っていられないわけです。

女性が妊娠するとします。興味深いことに、妊婦は、おなかの赤ちゃんはかわいいと思っています。かわいいからこそ、「いいお父さんをこの子にあてがいたい」と思うそうです。そこで、複数の相手の中で、ある男が1番狩猟が上手だとすると、いろいろな人に「私は、この人と一緒にいたときに妊娠した」と言うのです。「これは夢でちゃんと私の守護霊が、この人とセックスをしたときにこの子ができたと告げてくれた」と言うのです。そのようにふれてまわって、みんながそう思い込む。そうすると、この狩猟の名手が赤ちゃんの社会的父親になるのです。そういうふうにして父親が決まるのです。DNAの検査はない生活でしたから。

父親になった人には、育てる義務は生じないのですが、猟でたくさん獲物が捕れたときは、子どものいるテントに行って、肉を少し分けてなどします。

しかも、親は子どもをしつけないといけないという義務はありません。そこに子どもがいれば、誰もがその子どもそのものに本当に関心を持つのです。だから子どもから見れば、自分のいるところ、みんなが関心を持ってくれているのです。例えば昨日0歳児がやっと立ち今日は歩いたとする

と、みんなが、「昨日は立っただけだったのに、今日は2歩も歩いた」と大騒ぎをします。そして隣のテントに行って、「あの子が2歩歩いたぞ」と言っ
てまわる。そういう状態なので、「この社会で赤ちゃんや、子どもとして育つのは、幸福だ」と私は思いました。ネグレクトという現象がないのですね。親自身はほったらかしているようですけど。しかし、いわゆる親のテントにいるときは、その子どもは同じように注目されているのです。

子どもたちは、いろいろな人の注目を浴びながら、毎日変化する状況のなかで暮らしていくことができます。したがって、マードックが言うような核家族、つまり父親と母親が子どもを育てるというよりも、コミュニティー全体がひとりひとりの子どもを育てている。そのなかで子どもが育っていくということなのです。

しかも、全ての人がある自分の父親は誰で、母親は誰だということをはっきりと知っています。私は、このような社会で、お父さんとお母さんが誰かということを知っている必要があるのかと不思議に思いました。調査を進めていくうちに、親がどの人かを知っておくことは非常に大事なことだとわかりました。例えばBさんが死んだとき、親とキョウダイと、それからBさんがセックスした相手すべて、それに子どもたち、この範囲の人たち（つまりミウチ）は、Bさんの遺体を埋葬してはいけません。遺体は、なるべく縁の遠い人が埋めます。

つまり、Bさんの遺体がお墓に入るまでは、Bさんが幽霊になって身近な人たちに取り付くのが怖いから、みんな身を潜めてじっとしているのですが、遺体が埋まることによって、Bさんのミウチは狩猟に出たり、魚取りに出たりする、行動の自由ができるようになります。

Bさんの遺体を埋葬するには男の人が4人要ります。Bさんのミウチにとっては、「この人たちはBさんをカトリックの十字架のついたお墓に入れてくれた。本当にありがたいことをしてくれた」と思い、Bさんの遺体を埋葬してくれた4人の人々を畏れ多く感じるのです。

このごろ日本では、こういう言葉は使いませんが、「畏れ多い」とは、「ありがたくて、ありがたくて言葉にもならない。直視することもできない」ということです。だからBさんのミウチの人たちは、遺体を埋葬して

くれた人たちを見てはいけないのです。

そのためには、Bさんは誰が自分の親であり、子どもたちにとっても、自分の親は誰であり、キョウダイにとっても、両親を共有するキョウダイは誰であるかを知っていないと、ミウチが死んだときに、どうしていいかわからない。そして、そのことが人生のなかで1番大事なこととされているのです。

さて、マードックや家族社会学で言う「家族の機能」というのは、現(うつつ)の世界、現実の世界における家族の機能を言っています。しかし、カシヨーゴティネの人たちにとっては、死んだあとの魂の世界での次元において、「家族」が非常に大きな意味をもちます。それがミウチの範囲なのですね。そういう意味では、マードック先生がおっしゃる「核家族」の範囲を超えている点が、非常に重要なことです。

それからもう1つは、カシヨーゴティネの社会を理解する場合、「家族圏」という考え方が非常に重要だということです。というのは、この人たちは核家族を単位として日常的な集団生活を営むことはありません。「集団としての家族」という場合には、「日常生活をともにして、協力し合う」ことが中心なのですが、カシヨーゴティネの人たちは必ずしもそうではありません。全く別の人と、臨機応変に狩猟仲間をつくったり、ブルーベリーをとりに行く仲間などをつくっていたり、テント生活をしたりします。

人生のなかで、ミウチの人たちが、ともに過ごす時間はBさんの人生の5分の1とか、もっと短いかもしれないのです。現実にはミウチ以外の全然縁のない人と暮らしている時間が長いかもしれないのです。1人の相手とずっと暮らすようなタイプの人には、ある意味で「集団としての家族生活」が成立している場合もありますが、それはカシヨーゴティネの社会においては珍しいことであって、あの人はいかモノ食いだというぐらいにしかなれないのです。

4 おわりに

これまでお話ししてきましたように、人間の家族のあり方を、非常に固

定的に考えないでおくことが重要であると私は考えております。環境問題とか、人間の国際移動とか、諸状況をいろいろ考えて、多様な現象が現出していくときに、家族のあり方についても柔軟な発想を、心のどこか片隅に置いておくということは、まことに重要であります。

面白いことに、カシヨーゴティネの人たちは、心を盗むのが1番いけないと言うのですが、情念にせよ、発想にせよ、具体的な行動にせよ、ひとりひとりの主体性を非常に大事にして、自分とは異なることをしている人のことを、あれはおかしいなどと全く言わないのです。この点も私はカシヨーゴティネの方々から学ばせていただいたと思っております。

これで私の話を終わります。

【註】

- 1) マードックの本書は、1949年の米国での出版の直後（日本語の翻訳が出版されるよりずっと以前に）、日本に紹介され、マードックのいう“nuclear family”が「核家族」と訳されました。そしてこの「核家族」が、戦後復興期の日本の住宅政策その他社会政策における前提とされてきています。
- 2) ヘヤー・インディアンという表現は、英語圏の外国人が日本人のことをジャパニーズと呼ぶのと同様で、この土地の言葉ではカシヨーゴティネと呼びます。筆者が調査した1961年の頃には、ヘヤー・インディアンという呼称からカシヨーゴティネという呼称へ移行する少し前だったのですが、ヘヤー・インディアンという表現で外国でも論文が書かれ、日本でもひろまっていました。しかし1980年代からは、カシヨーゴティネ（ヘヤー・インディアン）と表記することになっているのです。ただし、今日の講義ではヘヤー・インディアン（カシヨーゴティネ）と表現します。
- 3) 日本語はウラル・アルタイル語族のひとつですが、ハンガリー語などもその仲間です。

【参考文献】

- 原ひろ子 1986a 「ヘヤー社会における「テント仲間」と「身うち」」原ひろ子編『家族の文化誌 さまざまなカタチと変化』弘文堂：7-27。
——— 1986b 「人類社会において家族は普遍か — 未来と家族」原ひろ子編『家族の文化誌 さまざまなカタチと変化』弘文堂：288-304。

- 1989「第6章 人間関係の諸カテゴリー」原ひろ子『ヘヤー・インディアンとその世界』平凡社：255-293。
- 2001a「ジェンダー、セックス、セクシュアリティをめぐって」財団法人日本学術協力財団ほか編『男女共同参画社会 キーワードはジェンダー』財団法人日本学術協力財団：11-20。
- 2001b『家族論』放送大学教育振興会。
- 前田成文 1986「マレー農民の家族圏」原ひろ子編『家族の文化誌 さまざまなカタチと変化』弘文堂：29-50。
- Murdock, George Peter. 1949, *Social Structure*. New York: The MacMillan Company = 1986 内藤莞爾監訳『社会構造 — 核家族の社会人類学』新泉社。